

タイトル	塚本邦雄『水葬物語』全講義(10)
著者	菱川，善夫
引用	北海学園大学人文論集，15：A1-A23
発行日	2000-03-31

塚本邦雄 『水葬物語』 全講義(10)

LES POÈMES DROLATIQUE

第七聯はフランス語で標題がつけられておりますが、「レ・ポエム・ドロラティク」の「ポエム」は「詩」という意味、「ドロラティク」は「滑稽な、おどけた」という意味ですから、全体として「滑稽な詩」という意味になります。これはあきらかに、バルザック（一七九一—一八五〇）の小説『LES CONTES DROLATIQUE』（ア・コンテ・ドロラティク）をふまえていると見てよいでしょう。バルザックの作品は、日本語訳では『風流滑稽譚』の名で知られておりまして、『バルザック全集』（東京創元社 昭50）に、小西茂也の訳でおさめられております。バルザックがこの作品に手を染めたのは一八三一年で、以後三回にわたって刊行され、全部で三十篇の作品がつくられました。好色文学の傑作として有名なものですが、猥雑な題材を第一級

菱川 善夫

の芸術作品に昇華したところに、高い評価が与えられております。小西茂也も『バルザック全集』第25巻の解説の中で、へもろもろの世界好色文学よりその抒情味に於て遙に感覚的近代的で、また美学的形象に於ても、一段と芸術味を帯びている。かく擬古文的形式を用いて、芸術的に文学的に好色譚を昇華し、近代の感懐といにしえの行文との渾融が大調和したところに、「風流滑稽譚」の高いその芸術的気稟があるといえよう」と述べて、その芸術性を高く評価しております。時代は十六世紀のころ、登場する人物は、国王、法王、弁護士、司教といった身分の高い男達で、そのお相手をつとめる女達は、女王、貴婦人から、尼僧、小間使、洗濯女、箱入り娘と多彩をきわめ、そこで語られている物語は、姦通、密通のたぐいで、好色文学の特色がいかなく発揮された、名作中の名作というわけです。

塚本邦雄もこれにならって、短歌版「風流滑稽譚」を書こう

というわけですから、その心意気や壮とすべきでしょう。好色という主題がどこまで芸術的に表現できるのか。バルザックを敵にまわして争うとなると、第一にその手腕が問われなくてはなりません。また似たような題材を使ったにしろ、市民社会の形成期に筆をとったバルザックと、第二次世界大戦後の塚本邦雄とでは、当然時代や人間の扱い方に違いがあつてしかるべきです。それをどう処理するのか。まことに興味津々たるものがあります。

それでは塚本邦雄は、どんな人物を「風流滑稽譚」の主人公にえらぼうとしたのか。この一聯も三つの章から構成されておりますが、まず最初にもってきたのが「コキユの歌」ですね。「コキユ」から始めたところに、正統派の自負を見ることが出来ます。

「コキユ」(cocu)というのはフランス語の俗語で、女房を寝とられた男のことを指しています。日本文学の中にはあまりでてきませんが、フランスのコント(機知に富んだ短篇小説)やファルス(笑劇)の中では、笑いの重要な材料となつていっているのです。それを十分承知の上で、塚本邦雄は「コキユの歌」をまっ先に掲げたわけです。フランスの好色文学の伝統を引きついで勝負にでていますから、正統派の誇りを見ないわけにはい

かないでしょう。

では正統派の自負は、どんな表現をとって芸術化されているのか。早速個々の作品について検証してみることにします。

コキユの歌

156 風媒花ばかり培てて生きのびた園丁の掌の圓錐形果

「コキユの歌」はこの一首から始まりますが、描かれているのは「園丁」です。庭園の手入れをする庭師ですね。この職人は「風媒花ばかり培てて生きのび」てきたとありますが、「風媒花」に何か秘密がありそうです。「風媒花」とは、名前の通り、風が花粉を運んで受粉する花のことを言います。ちなみに虫が運んで受粉する花は虫媒花、水が花粉を運んで受粉するのは水媒花と区別されていますが、具体的に風媒花の植物名をあげると、松・杉・稲・とうもろこしといった名前が浮かんできます。しかしここでの人物は「園丁」ですから、稲やとうもろこしの農作物は除外して考えるべきでしょう。となると、この「園丁」が杉や松のたぐいばかりを「培て」つづけるのは、その実(「圓錐形果」)を愛翫するためだ、ということになります。

風媒花には、たしかに実がなりますけれど、松の実にしても杉の実にしてもその実は小さく、華やかな花の果実という印象ではありません。それを園丁がもてあそんでいる、というところは何の意味があるのでしょうか。一見おかしくも面白くもない歌のように見えます。しかしこれは「コキユの歌」の第一首なんですから、この園丁も当然妻を寝とられたコキユと解してよいでしょう。そうしますとこの「圓錐形果」は、ある連想を誘いだします。それは何か。それは女性の秘所にあるヘクリトリスです。そう読むことで、滑稽詩の妙味がにわかに立ちあがってくるでしょう。

この「園丁」が、なぜ「風媒花ばかり」を「^{そだ}培て」ているのか、という理由も、そう読むことではつきりしてきます。どだい風媒花は、花に関して言えば、地味な花でめだちません。虫をよび寄せる蜜や香りにも欠けています。そういう風媒花にだけ、なぜこの「園丁」が熱中したかという、花ではなくて、風媒花の「圓錐形果」がおめあてだったからです。これは笑える話ですね。

こういう作品は、深読みすることで楽しさが倍加します。風媒花は花粉症の元兇として知られています。が、「園丁」が、この風媒花に特別の愛情を注いできたのは、妻を寝とった男を、花

粉症で苦しめる復讐のもくろみがあつたためだ、というのはどうでしょうか。また「生きのびた」というところに、戦争の影を読みとると、陰影の濃いものになります。生きのびてせっかく戦場からもどってきたら、妻はほかの男に寝とられていた、という物語を導入すれば、「園丁」に悲哀の色調が付加されてきます。

157 楡の切株に腰かけ友情について議論をするコキユ同志

早くも二首めに「コキユ」という言葉をよみこんだ作品があらわれました。管理ふゆきとどきのため女房を寝とられた男たちが、「同志」としての結束を固めるため「友情」について議論を交わしているという内容ですが、もし現実こういう場面があつたとしたなら、すぐ滑稽に見えるでしょうね。「コキユ同志」の友情ですから、その友情は、寝とられ男のあわれさを前提になりたっている友情ということになります。それは同情が友情に転じたようなもので、男の本当の友情がその「議論」の中からうまれてくるとは思われません。そのように感じさせるうえでも、この場面設定は、なかなかよくできているように思いませんか。男たちは面と向かいあっているのではなく、「楡の

切株」に腰かけているんですね。大きな切株とは言っても、ここに腰かけられる人数は、せいぜい三・四人でしょう。お互い肩を寄せあって、切株の円い縁にそって腰をおろしているわけで、背中あわせに円座を組んでいる図が浮かびあがってきますが、この形そのものが、やがてばらばらになる彼らの運命をあらわしているでしょう。

同情からは決して友情はうまれません。女房に逃げられた男の悲哀を「友情」と錯覚し、「友情」にすりかえている「コキユ」の滑稽さが、この歌の主題とみていいでしょう。そうとれば、なにやら辛辣な諷刺がここには含まれています。

158 寝室の四隅の赤い蠟燭がときどきとり居留守がつづ

き

コキユ同志の議論が終わって、彼らはそれぞれの家に帰るわけですが、その一人の生活をよんでいるのがこの歌だと見ると、わかりやすいのではないのでしょうか。日中の「楡の切株」から、夜の「寝室」へと場面が切り換えられていますから、そう読んでも不自然ではないでしょう。

家に帰ったコキユは、家の中では「居留守」をつかっております。女房はもちろん男のところにいるわけですが、訪問客に

コキユであることを知られてはまずいので、客人の目を避けるために「居留守」をつかっているわけです。しかし夜になると、ときどきは、寝室の四隅にある「赤い蠟燭」に火をつけるんですね。本来ならそのローソクは寝室のムードを盛りあげ、エロスの発火装置の役を果たすはずですが、残念ながら肝心の女が欠けていますから、華やかなあかりは、かえって孤独なコキユのかなしみを照らしだすことになります。居留守をつかって、時々失われた時間をよびもどしているコキユのあわれさは、何やら胸をつくものがありますね。

159 石柱の裏に性器のゑをひとつづつ描き冬の夜のバルを

閉づ

閉じられた寝室空間から、一転して場面は「バル」、すなわち舞踏会の開放的空間へと移行しました。「石柱」が出てきますから、ヨーロッパ風の建物を頭の中に描かなければいけません。立派な「石柱」が広い舞踏会の空間を支えているのですが、その「石柱」の裏側に、「性器のゑ」を一つずつ描いて、冬の夜の舞踏会は閉じられました。「性器の繪」としないで、「性器のゑ」としたのは、へゑというひらがなの持つ淫靡な印象によって、

みだらな感じを視覚の上からも強調するためです。石柱の表側では、いくらなんでも人目についてしまいます。舞踏会の最中、石柱の人目につかない裏側のところに、こっそりと暗号のようにそれを描いていく。描いた男は、もちろんコキユというわけです。たぶんこの舞踏会では、彼女は、寝とった男と楽しげに踊っているのを見てよいでしょう。柱に身を隠してそれを見つめながら、コキユは一つずつそこに「性器のゑ」を描いていくんです。みじめな欲情を、そんな形で処理していくわけですが、いかにもコント風の面白さがこの中にはあります。舞踏会を背景に、卑猥な人間性がいきいきとあらわれているのではないのでしょうか。欲情が人間を滑稽な存在に仕立てているのは、いつの時代でも変わりありません。ヘノーパン・しゃぶしゃぶの現代だって同じことです。欲望の一点から人間を見たとき、どんな高級官僚もこのコキユと変わりがありません。そういう目でこの一首にむかうと、いつそう興が深くなります。

160 鹵獲品中の薔薇油やオパールに妃が飽きたころ、またい

くさ

ここで突然視点が男から女へと移動しました。イメージの上

では、舞踏会の歌がこの前にありますので、この舞踏会に集った貴婦人から、「妃」のイメージにつながったと見てよいでしょう。この王妃の魅力にとりつかれた男たちが、せっせとみつぎものをとりついでいるのですが、それはいずれも国産の品物ではありません。「鹵獲品」ですから、戦争で奪いとった戦利品です。その戦利品の中には、武器だけではなく、女を喜ばせるための「薔薇油」や「オパール」が、ちゃんとしのばせてあるわけです。「薔薇油」は香油として体に塗るものですから、この王妃の官能性を勾わせる働きをしています。「オパール」も、虹色のものは、宝石としてきわめて高価なものですから、「妃」の指の美しさを想像させます。

男たちが贈るこうした戦利品に囲まれて、「妃」はしばらく満足した生活を送っていたでしょう。これらの戦利品は、男の欲望の代価として贈られたわけですから、エロスのおこぼれにあずかった男たちはたくさんいたはず。戦争と好色とは、一見無縁なようでいて、実は深いつながりがあるんですね。しかしどんな贅沢も、いずれは飽きたときがきます。その飽きた頃に、また「いくさ」が始まると見ているところに、諷刺の目が利いています。女の欲望にはかぎりがありません。もつと珍らしいもの、もつと高価なものを献上しなくては、「妃」の歓心を

買うことができなくなりました。捨てられるのがこわい男たちには、再び新しい戦利品が必要になったのです。そのために、また「いくさ」が繰り返されるというわけですね。ああ、なんという愚かしさ！。

好色の歌の中にも「いくさ」が入りこんできていることは、戦争が塚本邦雄にとって、いかに切り離すことのできない主題であるかを語っています。

161 夫人への招待状の封蝋はとけたまま、馭者のゆくへが知れぬ

内容が他人に盗み見されないように、蝋で密封された「招待状」が「夫人」のもとにとどくはずでしたが、その封蝋はとけたままになっておりました。それは誰かが中味を読んだことを意味しております。犯人は誰なのか。解答はこの歌の中にあります。「馭者のゆくへが知れぬ」とありますから、「馭者」と見てまちがいありません。馭者は、それが発覚して怒りに触れることを恐れ、みずから身を隠したのか、あるいはすでに処分されてしまったかのいずれかです。単なる雲隠れとより、殺されたと見るほうが、このあとに続く「柩」との関連から言っ

て自然でしょう。

「招待状」は、何の集りの招待状なのか。盗み読みした馭者の命にかかわる内容となると、色恋抜きでは考えられません。乱脈なパーティーへの招待状だと見てまちがいないでしょう。当然のように、この「夫人」の背後には、寝とられる間抜けな夫の姿が立ちあらわれてくることになります。

162 果樹園に運びこまれるいくつかの柩の中にある假死のコキュ

前の歌に行方不明の馭者がでてきましたが、その関連で言えば、「果樹園」に運びこまれた「柩」は、いずれもみな身分の低い無名者のものと考えられます。権力者にとって不都合な存在とみなされ、仕末された者たちの「柩」です。彼らの死に正当性があるなら、「柩」は墓地に運ばれるべきでしょう。死者の尊厳のためにもそうあるべきですが、それが果樹園に運ばれているんですね。しかも「柩」の中には、「假死のコキュ」とあるように、仮死状態のまま詰めこまれているわけです。仮死ですから完全に死んでいるわけではありません。生きかえる可能性もあるわけですが、にもかかわらず地中に埋めてしまうんで

すよ。これは大変残酷な処置といわざるをえません。このコキユにしても、妻を寝とられたうえ、さらに仮死状態にされて生け埋めにされるわけですから、たまったものではありません。あきらかにある種の迫害が加えられたことを連想させます。こういうことを平気でできるのは、権力を握っている人間でしょうね。そういう人間が、欲望のおもむくままに、女をかたづけしから自分のものにしていく。そのあげくコキユにされた夫まで殺してしまうというわけです。

こういう残酷さは物語の中にだけあるわけではありません。いまの日本でも同じでしょう。政治家がいくら悪いことをしても、死ぬのはみな秘書です。これとそれとは違うというかもしれないませんが、「コキユ」というものの枠組みを広げて考えれば、現代に通じるものがここから見えてきます。強力な政治権力によって、生命が危機にさらされている時代のピエロとして、この「假死のコキユ」を読んでみてはどうでしょうか。

163 むすみぎきなどするくせは皇帝の馬車に便乗してうつさ

れき

「皇帝の馬車」に便乗して何をうつされたのか。病気ではなく、

「むすみぎき」する悪い「くせ」です。それも一種の病気といっているように、その病気をうつされたということは、皇帝の病原菌がいかに強烈であるかを語ることになります。それ以来、むすみぎきしないではいられなくなったわけですが、その元兇が皇帝であるところに、この歌の諷刺があります。おそらく「皇帝の馬車」の中では、金のことや政治のこと、女のことなど、思わず耳を寄せてむすみぎきしたくなるような話題が飛びかっているでしょう。これは「コキユの歌」の中の作品ですから、当然寝とった女の一件も話題にのぼっているに違いありません。またこの前には、殺されたコキユの歌がありますから、それについての噂もとどろきだされていると読むことができます。むすみぎきの欲望は人間の本能とはいえ、桁はずれにその欲望の強い皇帝の存在は、笑いを通り越して、いささかぞつとさせるものがあります。表向き立派な人間の裏にひそむ醜さ、滑稽さがここから伝わってきます。

もちろんむすみぎきのくせは、皇帝だけではなく、いっしょに馬車に乗っているとりまきの連中にあっても同様です。皇帝といっしょに便乗した人間達は、お互いに相手の話に耳をそばだてているんですね。お互いに相手から何かをさぐろうとしている。そういう不信をもって人を見る悪い「くせ」が彼らの処

世術になっっているわけです。一見悠然と構えているように見えながら、権力者というのは、聞き耳を立てて人の動静に気をくばり、いかに戦々恐々となっっているかということでもあります。そういう権力者とそのとりまきの醜い裏面がここに描きだされました。

164 皇后の寢室の扉にラテン語でつづられた「贗物に御注意」

「皇帝」を笑ったついでに、「皇后」も笑いの材料にしようとして作られたのがこの歌です。

フランス王朝でもスペイン王朝でもそうですが、皇后のまわりには、とりまき連中が出入りして機嫌をとり、権力の餌になりつこうと虎視眈眈としておりました。また皇后の夜のお相手、性の快楽のために奉仕する男達もたくさんいたわけです。それをまわりの連中はみな知っているわけです。それで皇后の寢室の扉に、格調の高いラテン語で「贗物に御注意」と書いたというところに笑いがあります。くだらない男をつかむんじゃないよ、といういやみがここに込められていることは言うまでもありません。皇后が手にいれた男は「贗物」ばかり。本心から皇后を愛してなんかいないわけです。男達もまたしたたかな連中

で、表向き完璧な奉仕を粧っているけれど、腹の中では全然違うことを考えている。贗の奉仕、贗の忠誠を違っているだけなのに、皇后は、まったくそれに気づいていないんですね。さて、誰がこのいたずら書きをしたのでしょうか。女とすることもできるけれど、お払い箱になった男とすれば、話はもっと面白くなります。

皇后がこういう状態であれば、コキュにされているのは皇帝ということになりますね。皇后の寢室から遠ざけられた皇帝は、それでは何をしているのか。それを描いているのが次の歌です。

165 鍵孔から覗けば黒きてのひらにすきとほりある雲雀の卵

鍵孔から覗いたら何が見えたのか。「黒きてのひら」におかれた「雲雀の卵」です。「黒きてのひら」の「黒き」が、どす黒い欲望の隠喩と見て差しつかえないでしょう。そのてのひらの上におかれた「雲雀の卵」は、では何を意味しているのでしょうか。雲雀は空中高くのぼって囀る鳥ですから、きっとこの皇帝の手から、雲雀のように女も飛び立っていったものと思われる。そして黒いてのひらの上には、雲雀の卵だけが残されたのだと推測されます。卵をうむのは雌ですから、それも逃げた

ものが女であることを連想させます。しかも卵は透きとおっているんですね。もし生命が卵の中で育まれていくなら、「すきとほりある」という状態にはなりません。からっぽの卵、中味のない卵、空虚な卵だからこそ、透きとおっているわけです。欲望の黒い手に、この空虚な雲雀の卵をのっけて放心している皇帝の姿が、ここから浮かびあがってくるでしょう。

皇帝や皇后など、権力者を笑いのめし、笑いによって偶像破壊を試みているところに『水葬物語』の大きな特質を指摘することができそうですが、その活力ある批判精神は、この作品の中にもいかに発揮されていることがわかりただけだと思います。

さて次は「扇の歌」に入ります。

扇の歌

166 ヴィオレテエラの春をひさいだ濕地には生れて消える

黒い水泡

「ヴィオレテエラ」——これは女の子の名前でしよう。ヴィオレッタ (violetta) というのは菫のことですから、それを人名に

して、菫の君、菫姫としたんですね。紫という意味もありますから、日本風に訳すと「紫式部」となります。転落した貴族の娘というイメージが、この名前の中から立ちのぼってきますが、その紫式部が春を売った「濕地」には、「ヴィオレテエラ」の美しい名前とは対照的に、「黒い水泡」が消滅を繰り返している、という内容です。

この「黒い水泡」にも、さきほどの「黒きてのひら」と同じく、欲望の暗示があります。誰の欲望なのか。「春をひさいだ」とありますから、売り手と買い手の両方の欲望が含まれているとみてよいでしょう。その欲望の「水泡」は、鴨長明の『方丈記』ではないけれど、「かつ消えかつ結びて」とどまる場所がありません。欲望の生成と消滅。それが終わることなく繰り返されていく、と見えているんですね。だからヴィオレテエラも、歴史の中で繰り返しの歌とあらわれてくるわけですが、それを悲劇的な目でとらえるのが目的の歌とは思われません。むしろ「黒い水泡」を背景に、ヴィオレテエラはかえって美化され、野の花の魅力を高めている、というふうに感じられます。

このヴィオレテエラをさまざまに変化させ、女の欲望の側から「人間喜劇」を書こうというのが、この「扇の歌」のねらいと見ていいでしょう。

167 燭臺がふいにとりさられて客間中の裳裾のはなびらひら

き

一見すると、たいへんきれいな歌ですね。きれいな歌ですが、ものすごくエロチックな歌です。「燭臺」がふいにとりさられたんですから、客間は突然暗闇の中にとざされました。その瞬間、客間中の女の裳裾がいつせいにパツと開いたというわけです。「はなびらひらき」は、裳裾の形が花を連想させるだけではなく、男の手がその裳裾の中にとびこんだことを意味します。「はなびら」は、スカートの形態と同時に女の性器の暗喩として機能するからです。このエロチックなところが、「レ・ポエム・ドロラティク」のおもしろいところです。

フレンチ・カンカンという有名なフランスの踊りがありますね。長いスカートをつけて踊りますが、むかし女達は下ばきをはいていませんでした。あとからは身につけるようになりましたが、最初にはいてなかったんです。ですから脚をあげるたびに男達は興奮したんですね。女のほうにしてみれば、それが芸の見せどころで、見えるか見えないかのきわどいところで、うまく裾をさばくのが彼女らのテクニクだったわけです。そういう時代を念頭においてこの作品を読めば、「裳裾のはなびらひ

らき」というのは、さらにエロチックな味わいが濃厚なものになるでしょう。湿地のヴィオレテエラは、ここでは客間のヴィオレテエラとしてよみがえりました。

168 花かげに七面鳥ら愛しあふ苑ゆけば水の浸みる木沓よ

「花かげに七面鳥ら愛しあふ」とありますが、ここで文字通り七面鳥を思い浮かべてはいけません。「七面鳥」は、男と女の暗喩とすることで、この歌の面白さが生きてきます。

「七面鳥」は、怒ると頭と首のところにある皺が七色に変化します。七面鳥という名前もそこからきているんですね。もともとこれはアメリカ原産の鳥ですから、アメリカ風のファッションに身を包んだ、七つの顔を持つ恋人たち、ということになります。七色の顔を持つ浮気な男と女が、この比喻でうまくとらえられました。しかも七面鳥の顔というのは決して美しい顔ではありません。むしろ醜いと言ったほうが正確でしょう。それも人間の心の中にひそんでいる欲望の醜さを暗示する働きをしております。

この七面鳥が愛しあっている苑——たとえば神宮外苑あたりでもいいんですが、その苑を歩いて行くと、「木沓」に水が浸

みこんでくるというわけです。木沓という固いものに、あまり水は浸みないと思いますが、どこへ行っても「七面鳥」がいて、いい加減うんざりする感じをそれであげたのではないでしょう。だから愛しあう恋人たちを、「七面鳥」と表現したところに十分諷刺は利いておりますが、水の浸みこんでくる木沓を描きだすことで、その諷刺に抒情味が付加されたと見てよいでしょう。

169 密會のみちかへりくる少女らは夜を扇のやうに身につけ

魅力的な「少女」が登場しました。密会から帰ってくる少女たちには、何のはじらいもありません。かえって華麗な雰囲気をもたせております。その雰囲気は、「夜を扇のやうに身につける」の詩的な表現によって、みごとにとらえられました。濃厚な闇の魅力——それを扇のように身につけているというのは、表現としてもとても魅力的です。この「扇」は、日本風の扇よりも、スペインの舞姫たちが持っているような扇を連想したほうがよいでしょう。その扇のイメージと夜を結びつけることで、「夜」に妖しさと躍動感がうまれました。夜に動きが生じただけではなく、香りも伝わってきます。そのようにして、「少女ら」は密

会を重ねるたびに華やいてくるわけです。このロマンの背後にあるのは、一種の悪の美学だと言ってよいでしょう。禁忌を犯すことで、少女は少女の無垢性から脱皮し、魅力的な存在へと変身することになります。この一首から「扇の歌」の章題がつけられたのも、ここに悪の美学があるからです。

前の歌に七面鳥が出てきましたが、七面鳥は尾を開くと、それが扇の形になります。だからイメージの上では、うまく繋がっていると言えるでしょう。

170 鳥貝やチイズが好きな僧正のソファのねちくぎたびたび

弛み

ここで「僧正」が出てきましたが、「コント・ドロラティク」に登場する僧正ですから、尊敬の対象としてではなく、笑いの対象として選ばれていると見なくてはいいけません。宗教的な権威者の裏にひそむ好色と欲望が笑いの材料になることは、バルザックの『風流滑稽譚』でも御手のものですから、あらかじめそれを念頭において読むと、面白い発見ができるはずです。

まずこの僧正は、相当のグルメのようですね。「鳥貝やチイズが好き」だとなると、肉食主義者とは違い、でっぴりと太った

体形の持ち主が想像されます。その体重の圧迫に耐えかねて、ソファの「ねぢくぎ」がたびたび弛んだというわけです。体重の重い人間が横になって寝返りでもうつたら、たしかに「ねぢくぎ」も弛んでくるでしょう。しかしそれだけの解釈だと、あまりにもまでもすぎて何の面白味ありません。「ねぢくぎ」が弛むのは、彼一人の重量ではなくて、もう一人、女の重量がそれに加わっているからではないのか——そう読んでみてはどうでしょうか。そう思わせるように、歌の中にはちゃんと仕掛けがつけられています。どこにその秘密があるかと言えば「ねぢくぎ」です。

「ねぢくぎ」——あきらかにこれは男の性器を暗示する小道具と言つてよいでしょう。その意味では、暗喩を実に効果的に使っているわけですが、「ねぢくぎ」が「弛み」となるとどういうことになるのか。その状態を想像してみて下さい。それは、笑いを引きださずにはおかないでしょう。「コント・ドロラティク」の本領が、いかになく発揮されているということになります。

III 寶石函につけて女帝へ鄭重にのびちぢみする合鍵獻ず

これも今の僧正の「ねぢくぎ」の変形譚です。猛烈に卑猥なものが、この中には匿されております。女帝へのご機嫌とりに「寶石函」を贈ったわけですが、それにもう一つ大事なものを添えたんですね。それが何かというと「鄭重にのびちぢみする合鍵」なんです。実際に伸び縮みする合鍵などあるはずがありません。これも「のびちぢみする」ところから判断して、ペニスの暗喩と見てよいでしょう。相手は「女帝」ですから、敬意を表して、その「のびちぢみ」も「鄭重に」ととらえたところが笑わせます。

もちろん生きたペニスをそのまま献上するわけはなく、これは人工ペニスの暗喩と見てください。日本では張形はりかたと言いますが、これはものすごく古い時代から作られておりまして、古代インドの性愛の文献『カーマ・スートラ』(四世紀ごろの作)にも、その記録が残っております。ヨーロッパでは十二世紀ごろ、尼さんのいる僧院でも使われました。そこでは、この「合鍵」が、『尼僧の宝石』と呼ばれて愛用されました。フランス語では「bijou indiscret」と言います。「ビジュ」は宝石という意味です。「アンディスケレ」(indiscret)には、無分別とか無遠慮なとい

う意味がありますから、(へ無遠慮な宝石)ということになります。もちろん隠語ですが、なかなか意味深長な表現ですよね。塚本邦雄がここに「寶石函」をもってきたのも、この隠語の意味を知っていたからだと思われます。

この人工ペニス、昔は木で作られましたが、蠟になったりゴム製になったりと変化してきました。さてこの「のびちぢみする合鍵」の材質は何なのでしょう。そんなことを考えさせて読者の楽しみをそそのめるのも計算のうちでしょう。ものすごく好色のな作品ですが、『水葬物語』の中に、諷刺の活用として、こういう作品があることは、もっと注意されていいことです。

172 賄賂まひなひの黒天驚絨びろうどの上沓うさに月日ながれぬ。女主人おんなしゅじんも老い

「賄賂」に「まひなひ」のルビがふつてありますが、「まひなひ」は「まひなふ」の名詞形です。依頼や謝礼のため、あるいは利益を得るために品物を贈る意味ですが、「賄賂」の漢字が使われていますから、これはあきらかに、利益を得るための不正な贈り物とみなくてはなりません。その贈り物が「黒天驚絨びろうどの上沓」というわけです。「上沓」ですから外出用ではなく、室内ではくはきものです。

この上等な上沓は、いったい何の利益を得る目的で贈られたのでしょうか。もちろん「女主人」の美貌と官能にありつく目的であることはすぐに察しがつきます。特に「黒天驚絨びろうどの上沓」は、女主人の脚の美しさをよびおこします。その脚を買うために、賄賂として上沓が贈られたとみるのが、一般的な解釈ということになるでしょう。しかしここは、前の歌との関連で見るとき、違ったふうに解釈することもできます。前の歌の「寶石函」と「合鍵」から、この賄賂もそれと関係づけて読むこともできるはずです。この「女主人」は、何を売る店の主人であるのか、一首の中には何も示されていませんが、それは前歌と一組みにして、この歌を読んでもいいと作者が考えているためかもしれません。そうしますと、特別な「寶石函」と「合鍵」を手に入れるため、その賄賂として、この上沓は贈られたと読むことが可能になります。そのほうが興味がそえられるでしょう。

しかし時の流れは残酷で、美貌の「女主人」もすっかり老女になってしまいました。いまはもう彼女に「賄賂」を贈る者など一人もおりません。その女主人の華やかな過去を物語っているのが「黒天驚絨の上沓」というわけです。その「上沓に月日ながれぬ」が、一抹の悲哀感をよびおこします。好色な物語の裏にある悲哀感。そこにこの一首の味わいがあります。

173 はれやかに喪服のゑりをたてて棲む夫人のヴィラの喇叭

水仙

「喪服のゑりをたてて棲む」とありますから、たぶんこの「夫人」は、夫を失って未亡人になったものと思われます。しかしここには、喪に服している、という暗い印象がまったくありません。むしろ晴れ晴れとした印象を受けます。「はれやかに喪服のゑりをたてて棲む」の「はれやか」が、その感情を伝えるからです。「ヴィラ」(villa)は別荘のことですが、その別荘に「喇叭水仙」が一杯に咲いているというのも、明るさをきわだたせているでしょう。「喇叭水仙」は、水仙の中でも大型で、一番華やかな水仙ですから、ここには「喪服」が象徴する死と、「喇叭水仙」が暗示する生とが、対照的にとりいれられています。

しかし生死の対比だけではなく、わざわざ「喇叭水仙」をもってきたところには、隠された意図があると見なくてはならないでしょう。女の体の中にも、実は喇叭管という器官があるんですね。卵巣から卵子を送りだす管ですが、「喇叭水仙」が暗示するのは、まさにその強烈な性の特性です。「喇叭水仙」の「喇叭」の持つ開放感、したがつて性の開放性と結びつきます。「喪服」がかえってそれを強調する働きをしているでしょう。喪服のま

ま男を誘惑する妖しい魅力がこの「夫人」にはあります。喪服を着た彼女の最初の餌食になるのは誰なのか。そんな物語を空想したくなるような一首と言ってよいでしょう。

つづいてあらわれるのも葬儀にかかわる歌です。

174 密葬のかへり司祭に褒められた喪服も明日はぬぐことに

決め

前の歌が「はなやかに喪服のゑり」をたてている夫人の歌でしたが、ここではそれを受け、喪服を「ぬぐことに決め」た歌をもってきました。

「密葬」のかえり、「司祭」は「喪服がよくお似合いですよ」と褒めたんですね。普通なら喪主の悲しみを慰める言葉を口にするはずですが。職業がら、彼も形式的に慰めの言葉を口にしたでしょう。しかし彼の本心はそこにはなく、未亡人となったのにつけこんで、彼女に言い寄ろうとはかったわけです。その魂胆があつての褒め言葉とらなくてはなりません。ところがその言葉が、逆に喪服を脱ぐ決心に火をつけた、というところに笑いがあります。喪服が似合うからといって、いつまでも喪服美人でいられるか、死者の追悼は今日一日で結構、明日はさっ

さと喪服を脱ごうというわけです。喪服を脱ぎ捨てることは、喪服を褒めた「司祭」を捨てることを暗に意味しています。ここにも死の感傷性は微塵もありません。前歌の「喇叭水仙」にみられた性の開放感と「ぬぐことに決め」の決意もごく自然に連動しますから、ここにも性の匂いがこもることになります。死が軽くなって、女の性が開放的になった戦後日本の風俗が、こうした作品の背後に透けて見えるような気がしますね。

175 紅海をさかのぼり来し寶石の密輸者に織きゆびをからます

「紅海」は、アフリカ大陸とアラビア半島の間に横たわる細長い海です。地中海とはスエズ運河でつながっていますが、その紅海をさかのぼってきた「密輸者」が登場し、エキゾチックな雰囲気をつくりだしています。「密輸者」ですから、これも正式なルートに従って売買する商人ではありません。密輸した物を売るわけですから、裏道の商売です。さてこの密輸者を待つているのは誰でしょうか。「織きゆびをからます」にあきらかなように、男を誘惑する娼婦達です。密輸者は、この娼婦の手に落ちて、やがて女の「織きゆび」に宝石が輝くことになるでしょう。

う。そう思わせるものがここにはあります。好色なのは「密輸者」なのか「織きゆび」なのか。いずれにしろ女郎蜘蛛のようにしたたかな女の手にかかって、密輸者は、宝石の大半を失う破目になるはずです。

これが「扇の歌」の章のむすびにおかれているわけですが、こうして見てくると、好色という主題が非常に重要な要素になっていることが、一首一首の鑑賞を通してわかりただけたかと思えます。バルザックの『風流滑稽譚』にならっていることは、すでに述べましたけれど、日本で言えば、井原西鶴の『好色一代男』や『好色一代女』の世界なんですね。井原西鶴は大阪で生まれ、大阪で活躍しましたが、その西鶴の血は、塚本邦雄の中にも流れているように思います。井原西鶴と塚本邦雄——これは塚本邦雄論の魅力的なテーマの一つになるはずです。

さて、「LES POÈMES DROLATIQUES」の最後の章は「薔薇疹」です。

薔薇疹

一首一首の作品鑑賞に入る前に、まずこの「薔薇疹」について

て説明しておくことが、内容の理解に欠かせないと思いますので、最初に「薔薇疹」とは何かについて話しておきましょう。

「薔薇疹」——とてもきれいな言葉ですが、これが何を指しているのかということを知らないで、うかつに使うとんでもないことになります。実際この言葉を模倣して使う人があらわれました。おや、きれいな言葉だということで蚊や虫に食われて赤くなつたあとを「薔薇疹」と言つたわけですが、これは危険きわまりないことです。「薔薇疹」というのは、梅毒の第二期の症状としてあらわれる発疹のことです。だからちよつとした皮膚炎で薔薇疹などと使うと、「あなた、梅毒ですか」と聞かれることになつちやいます。この発疹は背中や腹部にポツポツと出て、いつん消えるんですが、また出てくるんですね。梅毒も進行すると症状がひどくなって、この名称は使われなくなります。とにかく「薔薇疹」というのは梅毒の症状であることを頭に置いておいて下さい。

この梅毒の病名を題名としているわけですから、一連のテーマも、おのずとそれにかかわってくるあぶない部分が含まれている、とみてよいでしょう。早速歌に入ります。

176 出帆のおくれるたびに豪華船内の紳士がふやすあぶな繪

「豪華船」ですから、この船の乗客は、商用を目的としたビジネスマンや学生ではありません。乗船しているのはお金に恵まれた「紳士」たちです。ですから気象条件が悪く、出帆がおくれたからといって、かくべつ支障のある連中ではありません。むしろそのたびに港町での歓楽を楽しむ術を心得ていることは、増えていく「あぶな繪」の中に暗示されております。

「あぶな繪」とは、江戸時代後期に女の膚をあらわした扇情的な風俗画の名称ですが、ここはもつと露骨に、男と女の絡みあつた淫猥な絵を指している、ととつてよいでしょう。「あぶな繪」の「あぶな」は、もちろん危険な意味の「危な」から来ていますが、これは紳士たちの中にある危険な精神的症状や、危険な肉体的兆候を、この言葉によつて匂わせるために使われたとみることが出来ます。

塚本邦雄の歌には、対立的要素が含まれるというのが半ば公式になつていますから、ここでも、「豪華船」の優雅な外観や、紳士の裕福な生活とは逆に、その中にいかに醜い欲望がとぐろを巻いているか、それを強調する役をこの「あぶな繪」がはたしていることとなります。いや、ここは題名が「薔薇疹」です

から、この「紳士」の背中には、すでに梅毒第二期の「薔薇疹」があらわれている、と読むこともできます。そう読むほうが、「あぶな繪」の「あぶな」が生きてきます。そこが読みの面白いところですね。

117 デカメロンの終りの朝、ぬるぬるとなま卵嚙む轉落公子

「デカメロン」は、イタリアの作家、ボツカチオの作品名ですね。ボツカチオは十四世紀の人で一三二三年の生まれですから、バルザックよりは、ずっと古い時代の人ですが、このボツカチオの書いた『デカメロン』は、岩波文庫では六冊、新潮文庫では五冊に収められて刊行されています。

この作品は、ダンテの『神曲』に対して「人曲」という評価が与えられております。つまり神の物語ではなくて、人間の物語だというわけですが、「人曲」と言われるだけあって、バルザックの『風流滑稽譚』と同じように、ここでも好色が大きな主題となっております。

ボツカチオはナポリに行つて、商売の見習いのために銀行につとめましたが、銀行の融資先の王家に出入りをし、そこで上流階級への見聞を広めました。それを作品の素材として使った

わけです。

話は一三四〇年、フィレンツェの街がペストの被害を受けたところから始まります。そのペストの難から逃れるために、十人の男女(男三人、女七人)が、フィレンツェ郊外の別荘に集まりまして、十四日間そこに滞在をします。その滞在期間中、休日のをぞいて、十人が一日につき必ず一つの話をするわけです。そうしますと一日に十の物語ができあがります。それを十日繰り返すと百話になりますね。ですからこれを『百物語』とも言います。

一首はこの『デカメロン』を頭に据えて歌いだされていますから、「轉落公子」は、三人の男の中の一人といつてよいでしょう。「デカメロンの終りの朝」とあるように、『百物語』を語る最後の朝に時間が設定されました。今日で最後という日、この「轉落公子」は何を話そうかと、朝の食卓にむかい、「ぬるぬる」と「なま卵」をのみ下したというわけです。「なま卵」は、なまあたたかくて、何か気持ちの悪い感じがしますけれど、この「なま卵」の感触が、轉落公子の倦怠感と無気力とを実感のあるものになっています。最後の話も、いずれ好色な内容の話にきまつておりますが、ずるずるとその沼にはまって、その沼から脱けだすことはできないでしょう。

「デカメロンの終り」がやってきたからには、この転落公子も、いずれペストでやられた街にもどらなくてはなりません。ほんとうの生の倦怠は、その日常にもどったところから始まるわけですが、「ぬるぬる」と咽喉を下る「なま卵」は、その悲劇の予兆を暗示しているようにも感じられます。

178 割禮の前夜、霧ふる無花果樹の杜で少年同志ほよせ

これだけ切り離して読むと、とても美しい作品です。しかしこれが「薔薇疹」の中に入っているということ念頭において読んだ時、美しいだけではないものが、そこに加わってくるはずです。

「割禮の前夜」の「割禮」とは何なのか。皮膚で包まれている男の子のペニスの先にメスをいれ、その皮膚をまるく切りとる儀式です。ユダヤ教では、現在も大切な宗教儀礼としておこなわれておりますが、そこにはそれなりの意味があります。ユダヤ人は、バビロニアに征服されてバビロンの捕囚となりました。そのため国を喪ったわけですが、国を喪ったにもかかわらず、民族としての同一性を守るために、宗教的な儀礼を厳守しました。割礼もその一つですが、おそらくそこには、ユダヤ民族に

もたらされた苦しみ、故国を喪って長い間さまよい続けなければならなかった悲しみ、それを子供の時から肉体に刻印し、忘れないようにしようという意味があったと思います。ユダヤ教の場合には、生まれて間もなく行なわれますが、この歌では「少年」となっておりますから、これは宗教儀礼ではなく、青年になるための通過儀礼とするほうがよいでしょう。そうすると痛みに耐え、苦痛に耐えて大人になる、という意義が見いだされることとなります。苦痛の体験を通して大人になるという儀式は、原始社会の中で広く行なわれていた儀式ですが、割礼もその一つです。

「割禮の前夜」、少年達は一箇所に集められました。場所は「霧ふる無花果樹の杜」です。明日からは大人になるという前夜、これから先の不安と孤独の共有によって、「少年同志」は、ぴつたりとほほを寄せあっております。このナイーヴな美しさは、さきほどの「紳士」や「転落公子」の反対側にある美しさですが、しかしこの少年も大人になれば、あぶな絵をふやす紳士の列に加わっていくはずです。だから逆に言えば、少年には、少年の時代にはしか所有できぬ美しさがあることになります。この一首は、みごとにそれをとらえた作品と言ってよいでしょう。しかしどうして「無花果樹の杜」がでてきたのでしょうか。

他の森でもいいのではないかという疑問に答えるためにも、この問題を解決しておく必要があります。この「無花果樹」は、旧約聖書と縁が深く、有名なアダムとイブの話の中にもでてきます。知恵の木の実を食べて、彼らは自分達が裸であることに気がつきました。「あつ」と思って、あわてて植物の葉で大切なところを隠しましたが、その葉が実は無花果樹の葉だったんですね。だからそれを頭にいれて読むと、この無花果樹は、自然と少年の聖なるペニスの映像を引きだしてくることになります。「霧ふる無花果樹の杜」の「霧」が、さらにそのペニスを淨化する働きをしています。が、「無花果樹」は、それだけの詩的喚起力を蓄えている言葉で、塚本邦雄語彙集の中でも、特別に重要な言葉として記憶にとどめておかなければなりません。

179 遠方にあふれる湖、むづかゆくひろがりてゆく背の薔薇疹

いよいよ「薔薇疹」の歌に入りました。薔薇疹は発熱を伴いますので、それが「むづかゆく」という表現をうんだとみていいでしょう。快樂のあとに訪れる病いが、背中にうずき始めたわけですが、言語表現という視点から見た時、背中一面に広がる

「薔薇疹」は、妖しい美を感じさせます。その美しさを一層引きだしているのが、一・二句の「遠方にあふれる湖」です。背中の中うずきとは反対の、冷く生命感に満ちた湖は、病いにおののく男の魂の救済として、はるか遠方にあらわれたのではないのでしょうか。またそれは、男が求めた永遠の女性性——女の持つ豊かさと清浄さの象徴と見ることもできます。男は「薔薇疹」になったけれど、単なる肉欲だけではなく、あふれる清浄さを女の中に求めていたのだと思います。もちろんそれを手にいれることはできなかったけれど、その男の渴望がこの中には漂っています。薔薇疹になったから「あふれる湖」が見えたのではなく、「あふれる湖」を求めて、男は薔薇疹になったと解釈したいところです。娼婦のような女の中にそれを求めたから薔薇疹になったわけです。背徳的な「薔薇疹」と、その対極にある「湖」——ここでも相反するものが詩的緊張感をうみだしているでしょう。それは前歌の少年の緊張感と感覚的に呼応しています。

180 ありくびの皓い少女にことづける市長の夜盲症処方箋
「無花果樹の杜」の「少年」から「少女」へと転調しました。

「ゑりくびの皓い少女」とありますから清らかな少女ですね。白いには、〈明眸皓齒〉と女性美を表現する時の「皓」の字をあてていますから、宝石のように冷い感触がここから伝わってきます。そういう襟首の少女に「市長の夜盲症処方箋」をこずけた、という内容です。

この「夜盲症」もエロスや好色と関係がありそうですね。文字通りの「夜盲症」というより比喩的に使われているととってみましょう。夜になると目が見えなくなるということは、女のみさかいがつかなくなってしまう、区別がつかなくなってしまうということ、暗に諷刺しているのととることができます。襟首の「皓い少女」と、およそ反対の女達に、市長は目がくらみ、夜盲症的症状になっているのではないのでしょうか。だからこそ「ゑりくびの皓い少女」が、その目を覚ます導き役として選ばれたというわけでしょう。宝石のように固い襟首では、市長の好色の齒もたたない、という皮肉もそこにはこめられております。しかし、もしこの処方箋が功を奏して、市長の夜盲症が治ったとしたらどうなるでしょうか。こんどは、この市長は夜にもよく目が見えて、夜行性動物のように獲物を狙うおそれがあります。この処方箋は、市長の欲望をかえって刺激することになるかもしれません。病気になるっても、病気が治っても、どうや

ら救いようのない「市長」が浮かびあがってくることになりませんが、こういうふうに隠された物語を読み解くことで、諷刺の意味も鮮明なものになってきます。鑑賞行為を創造的なものにするためにも、ぜひ実行してほしいところです。

181 つかへないままに女系の秘家傳の媚薬はききめ喪ひそめぬ

女系家族の家伝となっている「媚薬」がでてきました。秘密の媚薬は効果抜群なのでしょう。その媚薬のおかげで、この「女系」の一族は男を興奮させ、女系の伝統を守り抜いてきたわけです。しかるに何たることか、その秘伝の媚薬も、使えないままに効き目が喪い始めたというわけです。使えないのは、訪れる男がいなくなったからでしょう。どうして男が寄りつかなくなったのか。よほど女が醜いためか、魅力がなくなったためか、それとも「秘家傳の媚薬」をしのぐ、もつとすごいものが開発されたためか、いずれにしろそこから先は、読者にまかせられていますので、各自で物語を楽しんでみて下さい。効力の喪った媚薬の笑い話がここでの内容ですが、「夜盲症の処方箋」から「媚薬」へつないだのも、面白い展開と言えます。この挿話的な

歌をはさんで、次には「市長」より、もっとおえらいさんの「宰相」へと飛んでおります。

182 宰相が明日の密會場所を掌の渦にうらなひ喰ふアスペル

ジュ

「宰相」が気にしているのは、公的な會議の場所ではなく、「明日の密會場所」です。もちろん女との密會場所ですが、それを「掌の渦」によって占っているんですね。掌の中には生命線や感情線が走り、指先にはそれぞれ指紋がありますが、それを「渦」と表現したのは、場所を決めかねて、心が激しく動揺し混乱している様子をよびおこすためです。

しかも欲望に混乱しながら、この「宰相」が口になっているのは「アスペルジュ」(asperge)、すなわちアスパラガスです。アスパラガスに喰いつきながら手の渦を眺め、「密會場所」の選択に迷っているというのも滑稽な図ですが、その滑稽感は、この「アスペルジュ」をもつてくることで決定的なものになりました。それは、アスパラガスの頭が男根を連想させるからです。「アスペルジュ」の隠喩的效果を十分に計算し、笑いを爆笑へと高めました。

「宰相」という権威を、こういう形で笑いのめすのは塚本邦雄の得意技で、そこにまた塚本邦雄の潑刺たる反抗の精神を見ることが出来ます。権力者の前でペコペコする人には絶対できない芸当です。偶像破壊を、こういう笑いの手法によって徹底させた人がほかにいるでしょうか。『水葬物語』のユニークさもそこにあることが、こういう作品を読むとよくわかります。

183 父母よ七つのわれのてにふれしひるの夕顔なまぐさ

き

これは塚本邦雄の歌と思われなくらい、整っている歌ですね。しらべの美しさも絶品です。

歌われているのは「ひるの夕顔」ですから、これは開花する前の夕顔ということになります。夕顔はその名のとおり、夕方になって花が開きます。ですから咲く前のつぼんだ状態の夕顔をイメージしなくてはなりません。その夕顔が手になまぐさかった、それをすでに私は七つの時に知っていました、と「父母」にむかって訴える形をとっております。夕顔には女の暗示が含まれていますね。『源氏物語』の夕顔のように――。だから清楚な女の裏側にひそむ性のなまぐさを、私は七歳にして

知っていたと読むことは可能でしょう。ヘキタ・セクスアリスの作品化とみていいのですが、しかしそれではあたりまえすぎます。この歌の解釈にとって重要なのは、なぜ「ひるの夕顔」をもってきたかということです。「ひるの夕顔」は、いま言いましたように、つぼんだ状態になっているでしょう。その形は少年のペニスの形を連想させます。あきらかに「宰相」の「アスペルジュ」との対比の効果が計算されていると見なくてはなりません。そう読むことで、ここにも美しいだけではない要素がいくてくることになります。少年のペニスと夕顔の蕾——上品でいてなまぐさい隠し味がいくてくるわけです。

184 にせ公爵と踊りたる夜の霧にふれ銀色の徽かびをふくバル・

シューズ

「バル・シューズ」は舞踏会用のシューズ、つまり舞踊靴のことです。その靴を履いて踊った相手が「にせ公爵」。そして踊りが終わったあと「夜の霧」に濡れながら帰ったら、シューズには「銀色の徽かび」がふいていた、というわけです。もちろんバル・シューズのまま帰ってきたわけではありません。外ばきの靴に履きかえて帰ったにもかかわらず、舞踏靴には徽かびがふきだし

ていたというんですね。「にせ公爵」の欺瞞と頹廃が、「銀の徽かび」となって表にあらわれたような印象があります。もっともこの徽は「銀の徽かび」ですから、そこにある種の頹廃美が感じられます。踊った相手はにせ者ですが、女は、それを本者と勘違いして踊ったのでしょう。いや、にせ者とわかっていて、むしろその方に快感を感じていたのかもしれない。いずれにしろ、「銀色の徽かび」には、本者よりもにせ者が横行する時代への諷刺がひそんでいると見ることができます。

「にせ公爵」というふうには、へにせという語を頭につけて権威を冷笑するのも、『水葬物語』で塚本邦雄がとりいれた諷刺的方法の一つです。

185 騎士たちのかへりくる夜、棘のある舌がしづかに水面に

ふれ

最後に登場するのが「騎士たち」ですが、この「騎士」も、塚本邦雄の手にかかる、颯爽たる騎士のイメージからは遠くなります。キリスト教を尊び、勇気・礼節を重んじるのが騎士道精神の本領ですが、この騎士たちは、そのような典型的な騎士ではありません。それを感じさせるのが下の句です。「棘のあ

る舌がしづかに水面にふれ」とは何をあらわしているのでしょうか。「棘のある舌」は、棘のある噂、棘のある言葉の喩と考えられます。実際に水面に触れているのは夜の空気、闇の衣ですが、それを、とげとげしい舌が水面に触れているとらえましました。「騎士たち」が帰ってくる夜、「棘のある舌」が水面に触れると、水面からは辛辣な言葉が、さざ波となつてひろがつていくんですね。騎士たちの行状の醜さ、不名誉な行為をあばく言葉が、そこから聞こえてくるというわけです。

中世騎士の物語の形を借りていますが、この「騎士たち」を、戦場から帰ってきた兵士たちととれば、これは鋭い諷刺の歌として胸を衝きます。この「騎士たち」は、女を犯し、無用な人殺しに手を貸し、教会をけがして帰ってきた騎士たちです。こういう騎士は、戦争の終わった日本にもたくさんいるでしょう。

架空の物語が、虚の世界から逆に鋭く現実を刺す——その効果を発揮するところに諷刺の現代性がありますが、その諷刺精神は、ここにもみごとにいかされております。戦争と好色、という主題でこの「LES POÈMES DROLATIQUES」を結んだというのも、偶然のことではないでしょう。そこにこの一連の批評性を読みとるべきです。